

性別違和を有する者の 性別移行と心理的成長に関する研究

目白大学大学院心理学研究科 西野 明樹
目白大学人間学部 沢崎 達夫

【要約】

人々の中には、出生時に指定された性別と性自認との間に不一致感を抱く者がいる。彼らが行う性別移行には、ホルモン療法や性別適合手術等による“身体の性別転換”，他者や社会との相互協調によってもたらされる“社会的性別移行”という2つの側面がある。

筆者等は社会的性別移行の観点から性自認に沿ったwell-being実現の促進要因を探るため、我が国の質的研究知見として示されている以下について数量的検証を試みた。(a) well-beingの伴う性別移行過程ではアイデンティティの再構築が行われる、(b) 男性／女性に対する同一性の感覚ではなく性別を超越した自我アイデンティティの感覚の強さが性自認に沿った社会生活の実現度と深く関係する、(c) 性別二元論に由来する他者や社会との軋轢や心理社会的葛藤・苦悩から抜け出そうともがき努めることで肯定的な心理的变化がよりよく導かれる。

以上3つの仮説は性別違和を有する者326名から得た有効回答に対する統計的検討により、おおむね支持された。また、(a) 過去から現在まで一貫して揺るぎない性自認を保持しているとの自負が心理的成長に負の影響を与えること、(b) 現在から未来に向けて展望が開けていることがエンパワメントにつながること、(c) 人間らしい生き方と親しみの再認には、対自的アイデンティティと対他的アイデンティティがともに正の影響を与えることが示された。

キーワード：性別違和，自我同一性，心理的成長，性別二元論，エンパワメント

問題と目的

1. 性別違和に関する精神医学的診断概念

2013年5月、アメリカ精神医学会（American Psychiatric Association：APA）発表の『精神疾患および障害に関する統計と診断マニュアル（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders：DSM）』が第4版（DSM-IV-TR）から第5版（DSM-5）へと改訂された。その改訂によって疾患／障害概念の定義と分類名が改められた疾患／障害概念の一つに、性別違和（gender dysphoria）がある（DSM-IVでは性同一性障害（gender identity disorder）（American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014）。

これに関するいくつかの変更点のなかで最も注目すべきは、概念定義から“性別二元論（sex/gender dualism）”が撤廃されたことであろう。たとえば、従来“他の一方の性別（the other sex）”と表現されてきた箇所は、“出生時に指定された性別ではない他方の性別（あるいは指定された性別とは異なる性別）（the other gender (or some alternative gender different from one's assigned gender)）”との説明的記述に変更されている。性同一性障害と診断される者が訴える自己に対する性別の認識（性自認（gender identity））が必ずしも生物学的性（biological sex）とは反対の性別ではないことを踏まえ、性別違和を有する者が経験・表現す

る性別 (experienced /expressed gender) の多様性を尊重した結果と言われている。

2. 身体への性別違和感と性別転換

性別違和感と精神的苦痛 人にとって“性別”は、その人がその人たることを規定する重要な構成要素のひとつと言える。そのため、出生時に医師や助産師によって指定された性別 (assigned gender) と性自認との間に性別違和感 (gender dysphoria) を有する者は、生来的な生物学的性の特徴が反映された自らの肉体を嫌悪し、強い精神的苦痛を抱くこととなる (日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会, 2012)。生物学的性の特徴が顕著となる第二次性徴期にはその身体の変化から解放されたいという願望も強く抱かれ、大多数が自殺念慮、自傷行為または自殺企図を経験するという調査結果 (真鍋・花田・上石, 2000; 中塚・江見, 2004) も報告されている。

身体的治療による性別転換 ホルモン療法 (cross hormone therapy) や性別適合手術 (sex re-assignment surgery) 等の身体的治療は、医療者側から言えば“性別違和の軽減によるメンタルヘルス改善”, 性別違和を有する者の視点から言えば“間違っただの性 (生物学的性) の特徴を本来のものに戻すこと”を目的とした医学的治療として知られている。生物学的性とは反対の性ホルモン薬を体内に投与するホルモン療法では、体の肉づきや体毛の濃さ等、身体の特徴に一定の変化がもたらされる。性別適合手術は、精巣摘出・陰茎切除・造陰・外陰部形成 (生物学的性がMaleの場合) や卵巣摘出・子宮摘出・陰閉鎖・尿道延長・陰茎形成 (生物学的性がFemaleの場合) の総称で、当人の性別違和感等に応じて施される。身体的治療は、性自認とその身体に反映されている性別の特徴の不一致を一致の方向に近づけるための治療方策と捉えられる。

身体的治療の限界と課題 しかし、身体的治療が公的医療保険制度における給付対象外となっている日本では治療費用の自己負担が大きくなり、施術等を担う医療資源も乏しい。身体への侵襲性も高いため、持病や資金繰りの困難を事由にやむなく身体的治療 (特に、性別適合手術)

を断念する者が少なくない。当人の性自認のあり方やそれまでの生活歴、周囲との対人関係や縁戚関係との折り合いを鑑みた結果、身体的治療を求めないことを決断する者もいる。

また近年、いくつかの実証的研究によって、ホルモン療法 (Dhejne, Lichtenstein, Boman, Johansson, Långström & Landén, 2011等) や性別適合手術 (Udeze, Abdelmawla, Khoosal & Terry, 2008等) の効果は性別に関わる問題に限定され、全般的な精神的健康の向上には十分に寄与しないことが指摘され始めている。性別適合手術を済ませたMTF (Male to Female) の精神的健康が社会的スティグマによって脅かされているという見解を述べる論文もある (Sanchez & Vilain, 2009)。身体における性別転換が必ずしも良好な社会適応を導いていない実状がうかがわれる。

3. 直面する生きづらさの2側面

性別違和を有する者が直面する生きづらさは、性自認とその身体に反映されている性別の特徴の不一致によって引き起こされる“身体的障害”と、性自認と他者や社会からみなされる自己の性別の不一致によって引き起こされる“社会的障害”という2側面から捉えると理解しやすい (西野, 2011)。これを模式化したのがFigure1である。

身体的性別転換は、身体の特徴を生来的なものからその反対の性別のものへと転換させていく性別適合手術等の医学的治療によってもたらされる。対して社会的性別移行は、彼らが生活するコミュニティ環境や、必ずしも“男・女”に振り分けられないその人独自の性自認、その人がすでに持っている様々な内的・外的資源を活かして行われる。身体的性別転換と社会的性別移行は相補的・相互促進の関係にあり、身体への医学的治療だけではその人独自の性自認に沿ったwell-being実現を伴う性別移行は果たし得ないことがよくわかる。

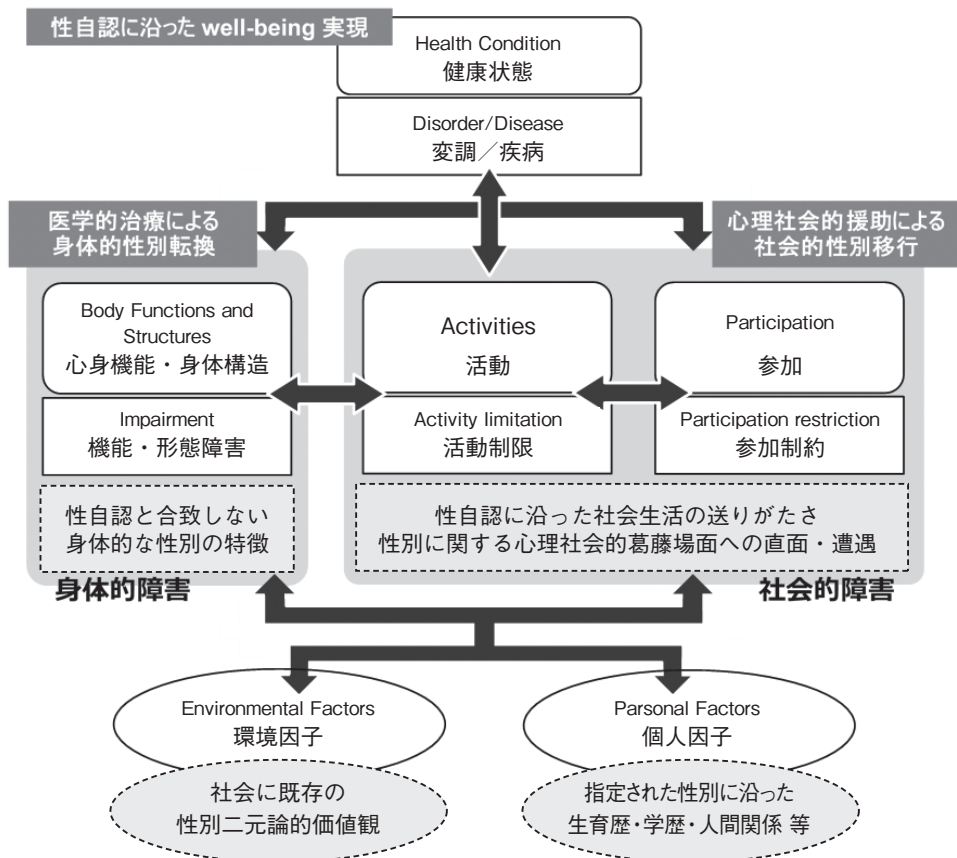
4. 性別移行に関する我が国の研究動向

鑑別診断および性別転換の観点から FTM (Female to Male) よりもMTFが多く発生しているという欧米諸国での疫学調査の結果

(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) に対し、我が国ではMTFよりもFTMの医療機関受診者数が圧倒的に多い。理由は未だ解明されていないが、現在も性別観や文化の違いからの影響は否定されておらず、我が国独自の知見を蓄積していく必要性が示唆される。だが、性別違和を有する者の心理社会的援助への注目はごく最近の研究動向である。我が国で報告されている性別違和を有する者を取り上げた心理学関連領域の研究の大半は、性同一性障害の身体的治療体制が整備された大学病院やその連携病院で身体的治療の適用判定のために実施された、投映法検査の結果等を材料としている(庄野, 2001等)。その関心は鑑別診断や身体的性別転換に向けられており、性自認の多様性は反映されていない。

性別に対する同一感の観点から 医学的治療

とは異なる観点から性別違和を有する者を捉えた希少な数量的研究のひとつに数えられる佐々木(2007)は、性同一性障害当事者のジェンダー・アイデンティティと典型的性役割の関連を調べる質問紙調査を行っている。調査対象は性同一性障害を事由として医療機関に通院している者に限られているが、FTMは身体的治療を受けている者の方がそうでない者よりもジェンダー・アイデンティティが高く、MTFでは治療の有無による有意差はないことが明らかにされている。続いて佐々木(2011)は、ホルモン治療の有無および性別適合手術の有無の観点からMTFとFTMをそれぞれ群分けし、ジェンダー・アイデンティティ得点とストレス・コーピングスタイルの影響関係を調べている。MTFとFTMの別や各身体的治療の有無によって影響関係の正負が逆転する結果が諸処に見受けら



※ 西野 (2011) を一部改変して筆者等が作成

Figure 1 性別違和を有する者が直面する生きづらさの2側面

れており、一定の方向性を見出すことは難しいが、性別違和を有する者の心理社会的支援を模索していく際の参考知見として価値がある。

しかしながら、これらで使用されているジェンダー・アイデンティティ尺度(佐々木・尾崎, 2007)は、(a) フェイス項目で答えた性自認によって読み替えが生じる質問項目(“自分が女性(男性)として望んでいることがはっきりしている”他)が複数ある点、(b) 4下位尺度中“自己一貫性同一性”と“他者一致性同一性”の2下位尺度得点が一般大学生よりもMTFおよびFTMで有意に低いことが妥当性の一根拠となっている点、(c) “男性”あるいは“女性”以外の性自認を回答した者は分析から除かれている点、(d) ジェンダー・アイデンティティについて“ある性別への統一性、一貫性、持続性の感覚”という、性別違和感と負の関連が強く想定される操作的定義が設けられている点等、性別二元論の反映や“性別”という観点の強調が目立つ。多様な性自認を持つ性別違和を有する者の実態を捉えるには課題がある尺度と言わざるを得ない。

性別移行を通じた心理的变化の観点から これらとは別の流れを成しているのが、性別違和を有する者自身の語りを素材とした質的研究である。強い性別違和と身体的治療の要望をもって医療機関を初診し“性同一性障害の診断と治療のガイドライン”という医療のつくった道筋を順調に進んで性別適合手術や戸籍の性別変更等を行っていくような典型的な成功物語(荘島, 2008)ではなく、それ以外の多様な生き方やあり方の選択を尊重し、性別移行にまつわる心理社会的葛藤や試行錯誤を掘り上げようとしている点の特徴と言える。

身体的治療を火急に求めていた1名のFTMとの継続的インタビューを行った荘島(2008)は、そのFTMが他者へのカミングアウト等を経ながら自分なりのペースでの治療を希望するようになっていく過程を“自己物語の生成”という観点から提示している。FTM/X¹自認者15名の語りを“FTM/X自認者はどのように社会とのかかわりを保ちながら性別移行していくのか”というテーマから質的に分析した西野(2011)は、全3期からなる“社会適応再構築プ

ロセス”を抽出している。この3期に共通するカテゴリー〔社会にある性別二元論の枠組み〕と〔性別二元論では捉えきれない自分〕との関係性は、違和感(第1期:従来の適応からの前抜け出し期)、相反(第2期:望む性での社会適応模索期)、内的葛藤(第3期:主体的な社会適応再構築期)と変化し、第3期では良好な社会適応と“他者や社会から男性とみなされるのは楽だが、真に受け入れられたいのは、女性として生きてきた歴史や残存する女性的な部分を包含したありのままの自分である”という内的葛藤とが并存していることが見出されている。

さらに西野(2014)は、16名のMTF/X自認者から聴取した性別移行体験過程を“自他への向き合い方の変化”の観点から質的に分析し、“自問自答”から“苦楽ある私だけの人生”に至るまでの心理的变化を説明するプロセス理論“心理社会的アイデンティティ再構築プロセス”を得ている。それによれば、心理社会的アイデンティティの再構築を促す最大の原動力は“艱難から解放された感覚”であり、性別にまつわる葛藤の完全なる解消や心理的苦痛からの解放が果たされなくとも、次第に“苦楽ある私だけの人生”を歩んでいる感覚を得ていくことが可能となる。身体的治療由来の外見的变化が生じていない時期にある要性別移行者13名の語りから抽出されている“未身体的治療の要性別移行者におけるカミングアウト体験プロセス”(西野, 2013)でも、抽出された3つのカミングアウト機能のひとつに、必ずしも“男・女”に振り分けられない自分らしさを伝えようとする“自己表現としてのカミングアウト”がある。

これらの質的研究知見を総合的に鑑みると、性別移行を通じたwell-beingの実現や良好な社会適応は、身体的性別転換度よりも社会的性別移行に伴う性別にまつわる心理社会的葛藤の内的引き受けや性別を超越した自我そのものの統合性と深い関連を持つことが予測される。

本研究の目的

本研究では、これまで質的研究によって示唆されてきた性別移行を通じた自我の統合を“性別移行を通して再構築される性別を超越した自我アイデンティティの感覚”と捉え、苦難や苦

悩が伴う性別移行を通じた肯定的な心理的变化との関連を数量的に検証する。なお本研究では、性別違和を有する者の性自認が必ずしも“男・女”に二分されないことを鑑み、性別移行を“指定された性別に沿った生活から性自認に沿った生活へと移行していく過程”と操作的に定義する。

このように定義される性別移行は、必ずしも、“精神科医による性同一性障害診断を経て身体的治療に進んでいく”という典型的な医療プロセス（莊島，2008）に従わない。そこで、精神医学的診断の有無や身体的治療の希望度にかかわらず、性別違和を有すると自認している者を“性別違和を有する者”とする。精神医学的診断が下されている者のみを指す場合には、“MTF”、“FTM”と表記して以下を述べる。

方法

1. 調査概要

実施方法 2014年5月から7月にかけて、性別違和を有する者を対象とした自己記入式質問紙調査を行った。調査用紙の配付・回収は、日本国内の性別違和を有する者あるいはセクシャルマイノリティ当事者による自助団体が主催する交流会等に筆頭筆者が出向いて行った。同日程に複数団体の交流会が開催される等の事由によって筆頭筆者が出向けない場合には、主催団体を代表する者に配布・回収を委嘱した。その他、団体の運営するホームページやブログ、メーリングリスト、ソーシャルネットワーキングサービスの掲示板で調査を告知して協力を求めた（紙面で配布したものと同様の教示文および項目が記載されたフォームを見ながらラジオボタン形式で回答を進めて最後に送信するWEBアンケートを使用）。また、依頼文にて以下の3つを調査への参加要件として提示した。(a) 性別違和を有する（有していた）、あるいは、性同一性障害（GID）当事者²と自認していること、(b) アンケート調査に協力できるような心身の健康を有していること、(c) 20歳以上であること（15歳から19歳までは保護者の同意があれば参加可能）。回答方法の教示はすべて文章で行った。

倫理事項 調査実施前には、調査の目的と方

法、調査は団体とは別に筆者等の責任下で行われていること、調査協力は各人の自由意思に委ねられていること、回答途中で体調不良や心理的負担を感じたときには回答を中断して欲しいこと等を含む倫理事項について口頭及び表書きで説明し（WEB調査は文章のみ）、質問項目への回答によってこれらに対する同意を意思表示するよう求めた。

2. 使用尺度

(1) **フェイス項目** 年齢と身体的性別を空欄に書き入れるように求めた。身体的性別については、次のような説明を併記した（“ここでいう身体的性別は、あなたが出生時に指定された（戸籍上の）性別、性染色体によって判定される性別、あなたの生来的な身体的特徴に反映されている性別等のことを指しています”）。

(2) **性別移行過程におけるアイデンティティの再構築** E. Eriksonのアイデンティティ理論をもとに作成された“多次元自我同一性尺度”（谷，2001）の項目を一部改変し、性別違和を有する者の性別移行を通じたアイデンティティ再構築を捉え得るものとした全20項目に回答を求めた。項目改変に際しては、性別違和を有する者の性別移行過程を記述する研究論文（西野，2011，2013，2014）を参考にしながら筆者等2名で協議を行い、多次元自我同一性尺度の開発者である谷からも改変および使用の許可を得た。

多次元自我同一性尺度は、“自己斉一性・連続性”（自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという感覚）、“対自的同一性”（自分がどこに向かって行こうとしているかよくわかっている感覚）、“対他的同一性”（他者からみられているだろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚）、“心理社会的同一性”（現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的結びつきの感覚）の4下位尺度（各5項目、全20項目）から成る。大学生への調査で十分な信頼性と妥当性を持つことが検証されており、自我同一性が課題となる青年期から成人期以降まで幅広く使用可能とされている。性別もそれ以外もすべて含めた“あなた自身”につい

て、“1. 全くあてはまらない”―“7. 非常にあてはまる”の7件法で回答を求めた。

(3) 性別にまつわる心理社会的葛藤のなかで経験される肯定的な心理的変容

米国で開発された“Posttraumatic Growth Inventory” (Tedeschi & Calhoun, 1996) を西野・沢崎 (2014) が邦訳した21項目を使用した。posttraumatic growth (PTG) は、“それまで持っていた信念や価値観では抱えられないような心理的衝撃の伴う出来事に曝された者が、そうせざるを得ない状況下での精神的もがきを経験するなかで生起される肯定的な心理的変容の体験”のことを指す。精神的健康や苦悩の軽減とは次元が異なる。西野・沢崎 (2014) の教示文中にある“苦境体験を通して”との記述を、性別移行を説明する文章 (“あなたの社会生活が身体的性別に基づくものから性自認に沿った性別によるものへと移行していく中で”) に置き換え、“0. 全く経験しなかった”―“5. 非常に強く経験した”の6件法で回答を求めた。

(4) ジェンダー・アイデンティティ尺度 (佐々木・尾崎, 2007)

低次元因子“展望的性同一性”と“社会現実的性同一性”から成る高次元因子“現実展望的性同一性”, 低次元因子“自己一貫的性同一性”と“他者一致的性同一性”から成る高次元因子“一致一貫的性同一性”を構成概念とする全15項目の尺度である。

“多次元自我同一性尺度” (谷, 2001) の4因子構造を踏襲した上で一部項目を加える等して作成された尺度で、性別違和を有する者の得点が性別違和を有しない者の得点に比して有意に低いことが妥当性の根拠のひとつとされている。原版の尺度には、最初に回答した性別によって質問文を読み替えて回答する項目がいくつか含まれている (例“現実の社会の中で、女性 (男性) として自分らしい生き方ができると思う。”)。本研究では、“女性 (男性)”との表記を“身体的性別とは異なるもう一方の性別”に変更し、“1. 全くあてはまらない”―“7. 非常にあてはまる”の7件法で回答を求めた。

(5) 性別移行進捗度

外見的性別転換度 見知らぬ他者からどのくらい身体的性別とは異なるもう一方の性別とみ

なされているかという観点から外見的な性別転換の度合いを調べるための項目である。ここ一週間の自分の状態を表す数字を“0. 身体的性別に即してみなされている状態”―“100. 身体的性別と逆の性別としてみなされている状態”のなかから答えるよう求めた。

性自認に沿った社会生活実現度 性自認 (必ずしも男・女のどちらかに振り分けられないその人独自の本来のもの) に沿った社会生活が実現している度合いを調べるための項目である。ここ一週間の自分の状態を表す数字を“0. 全く送れていない状態”―“100. 完全に送れている状態”のなかから答えるよう求めた。

結果

1. 分析の対象

回収された調査用紙 (339名分) から回答に不備があったものを除き、326名分の有効回答を得た (有効回答率96.2%)。身体的性別の内訳は、“男性” (男, 雄, ♂, MTF 等) と回答した者 (以下, MTF/X自認者) が119名, “女性” (女, ♀, Female, FTM 等と回答) と回答した者 (以下, FTM/X自認者) が207名であった。年代の内訳は10代が15名, 20代が129名, 30代が88名, 40代が63名, 50代が22名, 60代が9名で、平均年齢はMTF/X自認者が38.8歳 ($SD = 12.6$), FTM/X自認者が30.5歳 ($SD = 8.6$), 全体で33.5歳 ($SD = 11.0$) であった。

2. 測度の精査

使用尺度を精査した結果を以下に記述する。

要性別移行者用多次元自我同一性尺度 逆転項目の得点を反転させた後、谷 (2001) に倣って、因子数を4に固定した因子分析 (最尤法, Promax回転) を行ったところ、20項目すべてが、谷 (2001) が想定していた下位概念に対応する形で収束した (Table 1)。各下位尺度のアルファ係数 (Cronbach) は、 $\alpha = .82$ ― $.89$ であった。そこで、下位尺度ごとに項目得点を単純加算した数値を〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点, 〈要性別移行者対他自的アイデンティティ〉得点, 〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点, 〈要性別移行者自己同一性・連続性〉得点, 20項目の合計得点を要性別

Table 1 要請別移行者用多次元自我同一性尺度

項目内容	I	II	III	IV	谷(2001) ^a
第1因子(要性別移行者対自的アイデンティティ) ($\alpha = .89$)					
3 自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。[R]	.95	.11	-.14	.03	II
4 自分が何をしたいのかわからないと感じるときがある。[R]	.93	.01	-.07	.07	II
8 自分がどうなりたいたのかわかりきっている。	.73	-.02	.09	-.09	II
15 自分が望んでいるあり方がはっきりしている。	.60	.01	.16	-.08	II
12 自分の人生において、自分のすべきことがはっきりしている。	.44	-.12	.40	-.10	II
第2因子(要性別移行者対他的アイデンティティ) ($\alpha = .87$)					
19 自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。[R]	.03	1.01	-.11	-.05	III
17 人に見られている自分と本当の自分は一致しないとを感じる。[R]	.03	.73	.03	-.03	III
1 自分は周囲の人々に自分のことをよく理解されていると感じる。	-.05	.69	.16	-.18	III
7 本当の自分は人には理解されないだろう。[R]	.08	.65	-.05	.05	III
20 人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。[R]	-.04	.61	.13	.17	III
第3因子(要性別移行者心理社会的アイデンティティ) ($\alpha = .89$)					
9 現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	.10	-.04	.85	-.11	IV
11 現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。	.06	.03	.84	-.06	IV
5 現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある。	.02	.10	.74	-.03	IV
18 自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。[R]	-.06	.22	.54	.21	IV
16 自分がありのままに能力を発揮できる場所は社会にはないような気がする。[R]	-.04	.19	.48	.16	IV
第4因子(要性別移行者自己斉一性・連続性) ($\alpha = .82$)					
10 生来的性別に沿って生きていた頃の自分を過去に置き去りにしてきたような気がする。[R]	-.14	-.03	-.09	.85	I
14 今のままでは次第に自分というものの一貫性を失っていってしまうような気がする。[R]	.05	.04	.07	.72	I
2 性別移行を始める前の自分をなくしてしまったように感じる。[R]	.06	-.09	-.13	.67	I
13「生まれてから今までに一貫するような自分はない」と感じることがある。[R]	-.09	.05	.06	.65	I
6 いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする。[R]	.33	-.07	.14	.54	I
因子間相関					
	I	—	.41 **	.53 **	.48 **
	II		—	.69 **	.52 **
	III			—	.51 **

因子抽出法：最尤法 (Promax 回転)
N=326.

** $p < .01$.

a I：自己斉一性・連続性、II：対自的同一性、III：対他的同一性、IV：心理社会的同一性
注) 質問項目の末尾にある [R] は逆転項目であることを示す

移行者用多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale of Transgenders: 以下, MEIS-TG) 得点とし、性別移行を通して再構築された性別にまつわる自我アイデンティティの感覚の指標とした。

性別移行過程における Posttraumatic Growth 尺度 各項目について平均値と標準偏差を算出したところ、先行研究で“Spiritual Change”を構成している2項目双方に床効果が認められた。この2項目を除いた19項目について探索的因子分析(最尤法, Promax 回転)を行ったが、1項目の共通性が.20を下回った。この1項目を除いた18項目で再分析を行ったところ共通性はどれも.30を超えたが、3項目が2つの因子に.30以上の負荷を示し、その差は.10未満であった。これら3項目を除き、残り15項目で再度同様の因子分析を試みた結果、2因子構造が得られた(共通性はすべて.30以上)。第1因子(8項目)にまとまった項目は、先行研究で“Personal Strength”や“New Possibilities”, “Initiative”を

構成していたものが大半であった。第2因子にまとまった7項目中6項目は“Relating to Others”を構成していた項目であった (Table 2)。信頼性係数 (Cronbach) は、第1因子から順に $\alpha = .90$, $\alpha = .88$ であった。従来の PTG の測度が4から5つの下位尺度を持っていことを考えるとより単純な構造と言えるが、アルファ係数の高さが申し分ないこと、内容的妥当性が認められることを鑑み、この15項目を「性別移行過程における Posttraumatic Growth (以下, 性別移行 PTG) 尺度」として採用した。尺度得点及び下位尺度得点は項目得点を単純加算した数値とし、それぞれ、性別移行 PTG 尺度得点、〈自己に対する有力感の獲得 (Empowerment)〉得点、〈人間らしい生き方と親しみの再認 (Interpersonal Relationships)〉得点とした。

ジェンダー・アイデンティティ尺度 この尺度は、すでに性同一性障害当事者への調査から妥当性・信頼性が確認されている。全15項目中4項目(“自分が身体的性別とは異なるもう一方

Table 2 性別移行過程におけるPosttraumatic Growth尺度

項目内容	I	II	PTGI ^a	PTGI ^b	PTGI ^c
第1因子〈自己に対する有力感の獲得 (Empowerment)〉 ($\alpha = .90$)					
10 自分は困難に立ち向かうことができるようになった	.92	-.13	III	III	III
11 自分の人生に対してより良く取り組めるようになった	.79	.04	II	II	II
4 自分を信頼する気持ちが持てるようになった	.76	-.04	III	III	—
19 思っていたよりも自分は強い人間だということがわかった	.69	.05	III	III	III
12 物事の結末を、うまく受け入れられるようになった	.63	.12	III	III	—
7 新たな自分の生き方が見つかった	.51	.28	II	II	II
3 新たな事柄に興味を持つようになった	.48	.13	II	II	V
17 変化の必要な事柄について、自ら変えていこうと試してみるようになった	.46	.26	II	II	V
第2因子〈人間らしい生き方と親しみの再認 (Interpersonal Relationships)〉 ($\alpha = .88$)					
21 自分が他の人たちを必要としていることがわかった	-.16	.85	I	I	I
16 今ある人間関係を大切にしようと努力した	-.02	.76	I	I	I
8 他の人たちに親密感を持つようになった	.12	.69	I	I	I
15 他者に対して、より思いやりの気持ちが強くなった	.15	.63	I	I	I
6 問題に直面したとき、人を頼りにしてもいいということがわかった	.09	.60	I	I	—
20 人間のすばらしさを強く実感した	.27	.56	I	—	—
2 自分が生きている価値を改めて考えた	.20	.40	V	IV	—
因子間相関					
	I	—	.76 **		
		II	—		

因子抽出法：最尤法 (Promax回転)
N=326.

** $p < .01$.

a I : Relating to Others, II : New Possibilities, III : Personal Strength, IV : Spiritual Change, V : Appreciation of Life

b I : Relating to Others, II : New Possibilities, III : Personal Strength, IV : Spiritual Change and Appreciation of Life (Taku, Lawrence & Calhoun et al. 2007)

c I : Relating to Others, II : New Possibilities, III : Personal Strength, IV : Spiritual Change, V : Initiative (西野・沢崎, 2014)

Table 3 ジェンダー・アイデンティティ尺度

項目内容	
現実展望的性同一性 ($\alpha = .86$)	
展望的性同一性 ($\alpha = .80$)	
2 自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別として望んでいることがはっきりしている。	
5 自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別としてどうなりたいたいのかがはっきりしている。	
8 自分が身体的性別とは異なるもう一方の性別としてすべきことが、はっきりしている。	
社会現実的性同一性 ($\alpha = .79$)	
3 現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしい生き方ができると思う。	
6 現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしい生活が送れる自信がある。	
10 現実社会の中で、身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分の可能性を充分に実現できると思う。	
13 身体的性別とは異なるもう一方の性別として自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。[R]	
一致一貫的性同一性 ($\alpha = .86$)	
自己一貫的性同一性 ($\alpha = .79$)	
1 過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。[R]	
4 過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。[R]	
7 いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。[R]	
11 今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする。[R]	
14 自分の性別に迷いを感じることもある。[R]	
他者一致的性同一性 ($\alpha = .82$)	
9 人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。[R]	
12 身体的性別とは異なるもう一方の性別としての自分は、人には理解されないだろう。[R]	
15 人前で自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。[R]	

N=326.

注1) 質問項目の末尾にある [R] は逆転項目であることを示す

注2) 佐々木・尾崎 (2007) が“女性 (男性)”としていた部分を“身体的性別とは異なるもう一方の性別”に改変している (該当項目は質問2, 3, 5, 6, 8, 10, 12, 13)

の性別としてどうなりたいたのかはっきりしている”他)に天井効果が認められたが、この4項目は性別違和を有する者が抱く特徴的な感覚が反映される項目と考えられる。そこで、15項目をそのまま採用し、佐々木・尾崎(2007)に従って算出した数値を、ジェンダー・アイデンティティ尺度(Gender Identity Scale:以下、GIS)得点、高次下位尺度得点(〈現実展望的性同一性〉得点($\alpha = .86$), 〈一致一貫的性同一性〉得点($\alpha = .86$)), 低次下位尺度得点(〈展望的性同一性〉得点($\alpha = .80$), 〈社会現実的性同一性〉得点($\alpha = .85$), 〈自己一貫的性同一性〉得点($\alpha = .79$), 〈他者一致的性同一性〉得点($\alpha = .82$))とした(Table 3)。

3. 相関分析

外見的性別転換度と性自認に沿った社会生活実現度

本研究では、性別移行進捗度を調べるため、“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”の2つに回答を求めた。MTF/X自認者とFTM/X自認者の回答はTable 4のように分布していた。この2つの測度間でPearsonの積率相関係数を算出したところ、有意な中程度の正の相関が認められた($r = .54, p < .01$)。

性別移行進捗度と各使用尺度

性別移行進捗度として回答を求めた“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”がGISおよびMEIS-TG、性別移行PTGとどのように関連しているのかを検証するため、それぞれの測度間でPearsonの積率相関係数を算

Table 4 性別移行進捗度に関する度数分布(人)

	度 数 (%)			
	外見的性別転換度 ^{a)}		性自認に沿った社会生活実現度 ^{b)}	
	MTF/X自認者	FTM/X自認者	MTF/X自認者	FTM/X自認者
0—20	24 (20.17)	25 (12.08)	9 (7.56)	22 (10.63)
21—40	8 (6.72)	21 (10.14)	18 (15.13)	23 (11.11)
41—60	19 (15.97)	27 (13.04)	27 (22.69)	39 (18.84)
61—80	32 (26.89)	36 (17.39)	23 (19.33)	30 (14.49)
81—100	36 (30.25)	98 (47.34)	42 (35.29)	93 (44.93)
合計	119 (100.00)	207 (100.00)	119 (100.00)	207 (100.00)

a) “0. 身体的性別に即してみなされている状態”—“100. 身体的性別と逆の性別としてみなされている状態”

b) “0. 全く送れていない状態”—“100. 完全に送れている状態”

Table 5 外見的性別転換および性自認に沿った社会生活実現度との相関分析(Pearson)

	外見的性別転換度	性自認に沿った社会生活実現度
ジェンダー・アイデンティティ尺度		
〈現実展望的性同一性〉得点	.46 **	.40 **
〈展望的性同一性〉得点	.24 **	.19 **
〈社会現実的性同一性〉得点	.52 **	.47 **
〈一致一貫的性同一性〉得点	.46 **	.49 **
〈自己一貫的性同一性〉得点	.41 **	.42 **
〈他者一致的性同一性〉得点	.51 **	.56 **
要性別移行者用多次元自我同一性尺度		
〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点	.21 **	.30 **
〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点	.34 **	.52 **
〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点	.41 **	.55 **
〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点	.24 **	.36 **

出した (Table 5)。

性別移行進捗度とGIS GISの各下位尺度得点はいずれも“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”の双方に弱から中程度の有意な正の相関を持っていた。高次下位尺度〈現実展望的性同一性〉得点とその低次下位尺度〈展望的性同一性〉得点および〈社会現実的性同一性〉得点では、“外見的性別転換度”との相関と“性自認に沿った社会生活実現度”との相関はほぼ同等であった (順に $r = .24-.52, p < .01, r = .19-.47, p < .01$)。同様に、高次下位尺度〈一致一貫的性同一性〉得点とその低次下位尺度〈自己一貫的性同一性〉得点および〈他者一致性同一性〉得点も、“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”とにほぼ同等の相関を示していた (順に $r = .41-.51, p < .01, r = .42-.56, p < .01$)。

性別移行進捗度とMEIS-TG MEIS-TGの各下位尺度得点はいずれも2つの性別進捗度の指標双方に有意な正の相関を示していた。また、いずれの下位尺度得点も“外見的性別転換度”よりも“性自認に沿った社会生活実現度”との間により強い相関を示していた (順に $r = .21-.41, p < .01, r = .30-.55, p < .01$)。

性別移行進捗度と性別移行PTG尺度 性別移行PTG尺度を構成する2下位尺度得点のうち、〈自己に対する有力感の獲得〉得点は、微弱ではあるものの、“外見的性別転換度”と“性自認に沿った社会生活実現度”の双方に有意な正

の相関を示していた (順に $r = .12, p < .01, r = .20, p < .01$)。一方、〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点は、いずれの測度とも有意な相関を示さなかった。性別移行PTG得点は、微弱ながら“性自認に沿った社会生活実現度”との間で有意な正の相関を示していたが ($r = .20, p < .01$)、“外見的性別転換度”とは無相関であった。

性別移行過程における心理的成長とアイデンティティ

ジェンダー・アイデンティティおよび性別移行過程におけるアイデンティティの再構築について、性別にまつわる心理社会的葛藤のなかで経験される肯定的な心理的変容との関連を調べるため、GIS各下位尺度得点およびMEIS-TG各下位尺度得点と性別移行PTG尺度の各得点との間でPearsonの積率相関係数を算出した (Table 6)。

GISと性別移行PTG尺度 〈現実展望的性同一性〉得点とそれを構成する〈展望的性同一性〉得点および〈社会現実的性同一性〉得点の間には、それぞれ有意な弱い正の相関が認められた ($r = .23-.39, p < .01$) ($r = .26-.33, p < .01$) ($r = .17-.36, p < .01$)。

これに対して、〈一致一貫的性同一性〉得点とそれを構成する〈自己一貫的性同一性〉得点、〈他者一致的性同一性〉得点は、GISの〈自己一貫的性同一性〉得点と性別移行PTG尺度の〈人

Table 6 GISおよびMEIS-TGと性別移行PTG尺度の相関分析 (Pearson)

	性別移行過程におけ るPTG尺度得点	〈自己に対する有力感 の獲得〉得点	〈人間らしい生き方と 親しみの再認〉得点
ジェンダー・アイデンティティ尺度			
〈現実展望的性同一性〉得点	.34 **	.39 **	.23 **
〈展望的性同一性〉得点	.31 **	.33 **	.26 **
〈社会現実的性同一性〉得点	.29 **	.36 **	.17 **
〈一致一貫的性同一性〉得点	-.02	.05	-.10
〈自己一貫的性同一性〉得点	-.06	.01	-.13 *
〈他者一致的性同一性〉得点	.04	.09	-.03
要性別移行者用多次元自我同一性尺度			
〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点	.36 **	.43 **	.23 **
〈要性別移行者対他的アイデンティティ〉得点	.26 **	.27 **	.21 **
〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点	.28 **	.34 **	.18 **
〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点	.00	.09	-.10

Table 7 性別移行過程に伴うPTGに関する重回帰分析（強制投入法）

	性別移行過程に伴う Posttraumatic Growth 尺度			
	〈自己に対する有力感の獲得〉得点		〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点	
	$R^2 = .28^{**}$		$R^2 = .24^{**}$	
	β	t	β	t
ジェンダー・アイデンティティ尺度				
〈展望的性同一性〉得点	.07	.95	.24	3.24**
〈社会現実的性同一性〉得点	.06	.68	-.18	-2.00*
〈自己一貫的性同一性〉得点	-.26	-2.51**	-.36	-3.31**
〈他者一致的性同一性〉得点	.02	.17	.11	1.01
要性別移行者用多次元自我同一性尺度				
〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点	.39	5.20**	.22	2.78**
〈要性別移行者対他自的アイデンティティ〉得点	.12	1.63 †	.29	3.93**
〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点	.13	1.49	.15	1.75 †
〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点	-.13	-1.96*	-.25	-3.54**
性別移行進捗度				
外見的性別転換度	-.02	-.24	-.01	-.15
性自認に沿った社会生活実現度	.08	1.14	.00	-.05

N=326.

† $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

間らしい生き方と親しみの再認〉得点との間にごく弱い負の相関 ($r = -.13, p < .05$) が認められた以外はすべて無相関であった。

MEIS-TGと性別移行PTG尺度 〈自己に対する有力感の獲得〉得点及び〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点は、〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点、〈要性別移行者対他自的アイデンティティ〉得点、〈要性別移行者心理社会的アイデンティティ〉得点との間で、それぞれ有意な弱から中程度の正の相関を示していた ($r = .23-.43, p < .01$) ($r = .21-.27, p < .01$) ($r = .18-.34, p < .01$)。〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点との相関はどちらも有意でなかった。

4. 重回帰分析

性別移行過程における心理的成長の促進要因を調べるため、性別移行PTG尺度の〈自己に対する有力感の獲得〉得点と〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点をそれぞれ目的変数、4つのGIS低次下位尺度得点、4つのMEIS-TG下位尺度得点、“外見的性別転換度”、“性自認に沿った社会生活実現度”を説明変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 7）。

〈自己に対する有力感の獲得〉得点について調整済み決定係数は $R^2 = .28$ ($p < .01$) であった。4つのGIS低次下位尺度得点のうち〈自己

一貫的性同一性〉得点に有意な負の関連が認められたが ($\beta = -.26, p < .01$)、他の3下位尺度得点は関連を持っていなかった。MEIS-TGでは、〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉が有意な正の関連 ($\beta = .39, p < .01$)、〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点に有意な負の関連 ($\beta = -.13, p < .05$) を持っていた。性別移行進捗度の関連はいずれも有意でなかった。

〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点について 調整済み決定係数は $R^2 = .24$ ($p < .01$) であった。4つのGIS低次下位尺度得点のなかで有意な正の関連が認められたのは、〈展望的性同一性〉得点であった ($\beta = .24, p < .01$)。有意な負の相関は〈社会現実的性同一性〉得点と〈自己一貫的性同一性〉得点に認められた（順に $\beta = -.18, p < .05$, $\beta = -.36, p < .01$ ）。〈他者一致的性同一性〉得点には有意な関連を持っていなかった。4つのMEIS-TG下位尺度得点のうち、有意な正の関連が認められたのは〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点と〈要性別移行者対他自的アイデンティティ〉得点であった（順に $\beta = .22, p < .01$, $\beta = .29, p < .01$ ）。〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点とは有意な負の関連 ($\beta = -.25, p < .01$) を持っていた。どの得点も性別移行進捗度との関連は有意でなかった。

考察

1. GISとMEIS-TG

本研究で得られた4つのMEIS-TG下位尺度は、谷（2001）が多次元自我同一性尺度を開発した際に想定した自我アイデンティティの感覚に関する4つの下位概念に即応していた。各下位尺度のアルファ係数も十分な値を示した。性別に関する重大な心理社会的危機（ここでは性別移行）を経験する性別違和を有する者が再構築していく自我アイデンティティの感覚を捉え得る尺度として、MEIS-TGが一定の妥当性・信頼性を有していることが示唆される。

本研究で行った調査では、MEIS-TGだけでなく、同じく多次元自我同一性尺度（谷，2001）に性別の要素を加えて改変した尺度とされているGIS（佐々木・尾崎，2007）にも回答を求めた。もともなった尺度は同じだが、MEIS-TGが性別移行を経験した（経験しつつある）者の自我の同一性を捉えるために開発されたのに対し、GISは“ある性別への統一性、一貫性、持続性の感覚”を捉える尺度として開発されている。同一性の感覚を抱く先を、その人の“自我”としているか“ある性別（男（性）あるいは女（性））”としているかがこの2つの尺度の最も大きな相違点と言える。

2. GISおよびMEIS-TGと性別移行

GISと性別二元論 GISが“外見的性別転換度”および“性自認に沿った社会生活実現度”との間に示した相関を見てみたい。わずかではあるが、高次下位尺度〈現実展望的性同一性〉とそれを構成する低次下位尺度は“性自認に沿った社会生活実現度”と、もうひとつの高次下位尺度〈一致一貫的性同一性〉とそれを構成する低次下位尺度は“外見的性別転換度”とより強く相関していることがわかる。

〈現実展望的性同一性〉を構成している項目はどれも“身体的性別とは異なるもう一方の性別（佐々木・尾崎（2007）では“女性（男性）”であった）”という言葉を含んでおり、性別二元論が隠喩されている項目として読み取れる。一方、〈一致一貫的性同一性〉にこうした項目は1つしかない。この違いが、“見知らぬ他者から身体的性別とは異なるもう一方の性別とみなさ

れている度合い（身体的性別転換度）”と“性自認（必ずしも男・女のどちらかに振り分けられないその人独自の本来的なもの）に沿った社会生活が実現している度合い（性自認に沿った社会生活実現度）”との相関にも反映されたと考えられる。

MEIS-TGと性自認に沿った社会生活実現度 MEIS-TGの各得点は、GISの〈一致一貫的性同一性〉と同じように、“外見的性別転換度”よりも“性自認に沿った社会生活実現度”との間に強い相関を示していた。MEIS-TGは多様な性自認でのあり方を許容し得る項目から構成されているからかもしれない。しかしここで、MEIS-TGは教示文で“性別もそれ以外もすべて含めた‘あなた自身’”について尋ねており、明確に性別について問うている項目は〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉の4項目中2項目にとどまっていることに目を留めたい。西野（2014）の質的研究知見によれば、性別違和を有する者は指定された性別に即したあり方を抜け出して自らの本来的な性自認に沿ったあり方へと歩んでいく性別移行を通して、必ずしも男・女の別にとらわれない心理社会的アイデンティティを再構築していく。相関係数のみで多くを述べることはできないが、本研究で明らかとなったMEIS-TGと性自認に沿った社会生活実現度の正の相関は、こうした西野（2014）の見解を支持するものと考えられる。

3. 性別移行PTGについて

性別移行PTG尺度の構成概念

PTGは、精神的健康度や困難・苦悩の解消とは次元の異なる概念であり、哀しみや苦しみと心理的成長は併存し得るとの考えを根底に持つ心理学的概念である。先行研究ではおおむね4から5因子構造を持つとされてきたが、本研究では2因子構造が抽出された。米国で開発された原版の尺度と見比べると、性別移行PTG尺度に残った項目は、1項目を除き第1から3因子までに含まれた項目で占められている。原版の第4因子は〈Spiritual Change〉、第5因子は〈Appreciation of life〉であった。性別移行は、“指定された性別”に従って生きざるを得なかった者達が主体性を獲得し、その主体的決定に

よって、より本来的な性自認に沿った生活を回復していくための試行錯誤過程”と言える（西野，2014）。生まれ持った性別によって生きるという一種の宿命を自らの手で変革していく性別違和を有する者にとって、自身の肯定的な心理的変容は、Spiritual ChangeやAppreciation of Lifeのような人智を超えた大いなるものよりも、自身の成長や周囲の他者等のより日常的で身近なものによってもたらされたと感じられるものなのかもしれない。

自己に対する有力感の獲得

性別移行PTGの〈自己に対する有力感の獲得〉得点に負の影響を与えていたのは、GISの〈自己一貫的性同一性〉得点およびMEIS-TGの〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点であった。身体的性別とは異なる他方の性別への極めて高い帰属感は、相手に他方の性別として認められたい・扱われたいという気持ちを亢進させ、周囲の他者との対人葛藤や感情衝突や、性別移行が思い描くように捗らないことへの過度な自分卑下を引き起こしかねない（佐々木，2007，2011）。身体的性別とは異なる性別への高い同一性も、高い帰属感と同じ機序によって性別移行PTGのような肯定的な心理的変容に負の影響を与えている可能性が示唆される。逆に正の影響を与えていたのは、MEIS-TGの〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点であった。以下、これらの結果を2つの観点から考察したい。

自己内の同一性と他者間の同一性 まずは、〈自己一貫的性同一性〉得点が〈自己に対する有力感の獲得〉得点および〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点に負の影響を与えていたのに対し、〈他者一致的性同一性〉得点はどちらの性別移行PTG下位尺度得点にも有意な影響を与えていなかったことに注目したい。〈自己一貫的性同一性〉得点と〈自己に対する有力感の獲得〉得点はいずれもGISの高次下位概念〈一致一貫的性同一性〉を構成しているが、自己の性別に関する同一性が自己内で完結する一貫性なのか、自他間での認識の一致性にまで及ぶのかが異なる。性別移行PTGという観点から見ると、ある性別への高い同一性が肯定的な心理的变化を抑制するのは、その同一性が自己内で

完結している場合に限ると考えられる。

ジェンダー・アイデンティティと自我アイデンティティ 次に注目したいのは、GISの〈自己一貫的性同一性〉得点が先述のような負の影響を性別移行PTGの2つの下位尺度得点に与えていたのに対し、MEIS-TGの〈要性別移行者対自的アイデンティティ〉得点は正の影響を与えていたことである。特に興味深いのは性別移行PTGの〈自己に対する有力感の獲得〉得点についてで、前者がもっとも強い負の関連を示している一方で後者は最も強い正の関連を示している。統計的結果からは2つの得点が大極的な関係にあると考えられるが、項目内容から類推されるように、両尺度のもととなっている谷（2001）の構成概念に照らすと同じ下位概念を出自としており、同一性がある性別に対するものなのか自我に関するものなのかが異なるに過ぎない。見方を変えると、性別違和を有する者にとってこうした概念的相違は非常に大きな意味を持つものである可能性が指摘される。

そもそも〈自己に対する有力感の獲得〉は、PTGIのNew PossibilitiesとPersonal Strengthを構成していた項目から成っており、新たな経験に対する開放的態度や人間の強さに関する肯定的変容を捉える概念と言える。これまでに報告されている性別違和を有する者の心理的变化に関する質的研究は、その多くが、性別にこだわらない“自分なりのあり方”を見出すことが心理的安定や全人的な自己肯定の獲得につながることを示している。性別違和を有する者は、身体的性別と反対の性別で生きることではなく、自己の内面で同一性が感じられるような“自分なりの生き方”の実現を目指すことによって、自己に対する有力感を抱けるような性別移行を実現していけるのだと考えられる。

人間らしい生き方と親しみの再認

〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点に負の影響を与えていたのは、GISの〈自己一貫的性同一性〉得点と〈社会現実的性同一性〉得点、MEIS-TGの〈要性別移行者自己斉一性・連続性〉得点であった。〈自己に対する有力感の獲得〉得点で負の影響関係が認められなかった〈社会現実的性同一性〉得点は、現実社会のなかで身体的性別とは反対の性別として自分らしく

生きられている程度を表す。身体的性別とは反対の性別として自分らしさを発揮できていれば、あるいはその自信があれば、他者や社会に自らの独自のあり方について理解や相互協調を求める必要性は減じる。そのために、他者や社会との親和的かわりに関する肯定的な心理変化を経験しにくくなるのかもしれない。

正の影響関係が認められたのは、GISの〈展望の性同一性〉得点と、MEIS-TGの〈要性別移行対自的アイデンティティ〉得点および〈要性別移行者対他者的アイデンティティ〉得点であった。このことから、自身の内面的同一性と他者との関係性における同一性の双方が〈自分らしい生き方と親しみの再認〉に関する心理的变化に貢献することが示唆される。

4. 心理社会的援助の可能性

外見的性別転換度と性自認に沿った社会生活実現度の2つは、〈自己に対する有力感の獲得〉得点にも〈人間らしい生き方と親しみの再認〉得点にも関連していなかった。性別移行PTGは極めて内的な感覚であり、現実的にどのように性別移行が進捗しているかとは関連しないことが明らかになったと言える。

身体的治療（性ホルモン投与等）による外見的变化が得られていない時期の性別違和を有する者の語りから抽出した西野（2013）の“未身体的治療の要性別移行者におけるカミングアウト体験プロセス”でも、“素直な自分らしさの実感”や“男・女のこだわりからの脱却”などが概念化されている。また、具体的な性別移行に進むよりも以前、自分と同じような当事者の存在を知ること等によっても、身体的性別とは合致しない性自認への自己肯定が育まれる（西野，2013，2014）。

社会的性別移行の進捗を下支えする心理社会的援助は、身体的治療の補助・補完というような消極的な役割のみならず、よりよい性別移行を身体的治療とは異なる側面から促進させるもうひとつの主軸としての役割を担い得るものと考えられる。その際は、性別二元論という一種の先入観にこだわらず、その人独自のあり方を協動的に模索していくことで彼ら自身がエンパワメント（empowerment）されるようにかかわ

る姿勢が不可欠となろう。

5. 今後の課題

本研究では、性別移行PTG尺度が先行研究で報告されている尺度とは大きく異なる様相を示した。この結果に類似する因子構造を示す集団が存在するのか否か、存在するとすればどのような点が共通しているのか等を探っていくことで、様々な心理的困難に直面する者の心理的成長をよりよく見出せるのかもしれない。また、性別違和を有する者の性自認の特徴や性別違和感の強さ等が、性別を超えた自我アイデンティティの再構築や心理的成長にどのように影響するのかという観点に立った研究も興味深い。

今後は、こうした研究を積み重ねながら、性別違和を有する者のwell-being実現をよりよく促進し得る心理社会的援助の方策と可能性をさらに探究していく必要があると考える。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition; DSM-5*. Washington D.C. and London, England: American Psychiatric Publishing. (高橋三郎・大野裕 (監訳) 染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉 (訳) (2014). DSM-5 —— 精神疾患の診断・統計マニュアル—— 医学書院)
- Dhejne, C., Lichtenstein, P., Boman, M., Johansson, V. L., Långström, N., & Landén, M. (2011). Long-Term Follow-Up of Transsexual Persons Understanding Sex Reassignment Surgery: Cohort Study in Sweden. *PLoS ONE*, *6*, e16885. doi:10.1371/journal.pone.0016885.
- 真鍋幸嗣・花田雅憲・上石弘 (2000). 性同一性障害の性差 近畿大学医学雑誌, *25*, 165-169.
- 中塚幹也・江見弥生 (2004). 思春期の性同一性障害症例の社会的, 精神的, 身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討 母性衛生, *45*, 278-284.
- 日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会 (2012). 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン (第4版) 精神神経学雑誌, *114*, 1250-1266.
- 西野明樹 (2011). 性同一性障害を自認する当事者の性別移行のなかにみる社会適応再構築プロセ

- ス——FTMへの半構造化面接から—— コミュニティ心理学研究, **14**, 166-189. (Nishino, A. (2011). Re-construction process of social adaptation in the cross-gender transition of people admit he has Gender Identity Disorder: From semi-structured interview with Female to Male. *Japanese Journal of Community Psychology*, **14**, 166-189.)
- 西野明樹 (2013). 未身体的治療での社会的性別移行過程初期における“カミングアウト”とその意味——性別違和を有する者13名の語りをもとにしたプロセス理論の生成—— GID (性同一性障害) 学会雑誌, **6**, 43-54.
- 西野明樹 (2014). 性別違和を有する者の性別移行過程に見られる心理社会的アイデンティティ再構築プロセス—— MTFを自認する当事者16名との半構造化面接から—— コミュニティ心理学研究, **17**, 199-218. (Nishino, A. (2014). The process of re-constructing psychosocial identity during the gender transition in people with gender dysphoria: Semi-structured interviews with 16 individuals who admit to being MTF. *Japanese Journal of Community Psychology*, **17**, 199-218.)
- 西野明樹・沢崎達夫 (2014). 苦境体験における Posttraumatic Growthに関する研究——体験者の主観的意味づけに着目して—— 目白大学心理学研究, **10**, 11-24. (Nishino, A., & Sawazaki, T. (2014). A study of posttraumatic growth through adversity: Focus on the subjective meaning of one's experience. *Mejiro Journal of Psychology*, **10**, 11-24.)
- Sánchez, F. J., & Vilain, E. (2009). Collective Self-Esteem as a Coping Resource for Male-to-Female Transsexuals. *Journal of Counseling Psychology*, **56**, 202-209.
- 佐々木掌子 (2007). 性同一性障害当事者におけるジェンダー・アイデンティティと典型的性役割との関連 心理臨床学研究, **25**, 240-245. (Sasaki, S. (2007). Relationship between gender identity and gender role among people with GID. *Journal of Japanese Clinical psychology*, **25**, 240-245.)
- 佐々木掌子 (2011). 性同一性障害におけるジェンダー・アイデンティティを高めるストレス・コーピングスタイル 心理臨床学研究, **29**, 269-280. (Sasaki, S. (2011). Stress coping styles that raise gender identity among the transgendered. *Journal of Japanese Clinical psychology*, **29**, 269-280.)
- 佐々木掌子・尾崎幸謙 (2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 パーソナリティ研究, **15**, 251-265. (Sasaki, S., & Ozaki, K. (2007). Development of Gender Identity Scale. *The Japanese Journal of Personality*, **15**, 251-265.)
- 荘島幸子 (2008). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程——自らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討—— パーソナリティ研究, **16**, 265-278. (Shojima, S. (2008). A qualitative study of the Re-organization process of self narrative of a person with gender identity disorder. *The Japanese Journal of Personality*, **16**, 265-278.)
- 庄野伸幸 (2001). 心理検査からみた性同一性障害ロールシャッハ研究, **5**, 29-42. (Shono, N. (2001). Psychological characteristics of gender identity disorder through the Rorschach test. *Journal of the Japanese Society for the Rorschach and Projective Methods*, **5**, 29-42.)
- 谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273. (Tani, F. (2001). Structure of the Sense of Identity in Adolescents: Development of the Multidimensional Ego Scale (MEIS). *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 265-273.)
- Taku, K., Lawrence, G., Calhoun, G., Tedeschi, G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R. P., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety, Stress, & Coping*, **20**, 353-367.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the Positive Legacy of Trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455-471.
- Udeze, B., Abdelmawla, N., Khoosal, D., & Terry, T. (2008). Psychological functions in male-to-female transsexual people before and after surgery. *Sexual and Relationship Therapy*, **23**, 141-145.

謝辞

本研究で実施された質問紙調査に際しては、よりよい共生社会の実現に向けて尽力されている

る日本各地の当事者自助団体ならびに性別違和を有する当事者各位から、絶大なるご協力と力強いご声援を賜りました。各団体名と主な活動都道府県を列記して感謝の意を表すとともに、ご活動のさらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。

COMらっど（北海道）、スクランブルエッグ（青森県）、岩手レインボー・ネットワーク（岩手県）、性と人権ネットワークESTO（秋田県）、一般社団法人gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会（北東北支部（岩手県）、東京支部（東京都）、東海支部（愛知県）、関西支部（大阪府）、中国支部（広島県）、九州支部（福岡県、鹿児島県）、沖縄支部（沖縄県）、特定非営利活動法人GIDmedia（東京都）、特定非営利活動法人LGBTの家族と友人をつなぐ会（東京都）、特定非営利活動法人ReBit（東京都）、トランス☆プロジェクト（東京都）、FTMマガジンlaph, SDGにいがた（新潟県）、レインボー金沢（石川県）、まんまるの会（京都府）、トランスジェンダー生徒交流会（京都府）、特定非営利活動法人Japan GID Friends（大阪府）、G-FRONT関西（大阪府）、れいんぼー神戸（兵庫県）、SAG徳島（徳島県）、黒船CREW GID長崎（長崎県）、そのほか匿名希望7団体。

全国に渡る調査実施計画の実現を明に暗に支え励ましてくださった目白大学人間学部教授の黒沢幸子先生に深謝申し上げます。

脚注

1 西野による一連の質的研究知見（西野, 2011, 2013, 2014）は、出生時に指定された性別とは異なる性自認を持つことを調査参加者の要件としている。DSMにおける診断分類名の変更等にもなって各論文で使用されている言葉は若干異なるが、どの論文も性別移行先を身体的性別（sex）とは異なる性別（the other gender (or some alternative gender different from one's assigned gender)）としていることから、身体的性別がMaleである（あった）者をMTF/X自認者、Femaleである（あった）者をFTM/X自認者として表記を統一させている。

2 調査実施当時、“性別違和を有すること”

を指し示す言葉として“性同一性障害（GID：gender identity disorder）当事者”を用いることが一般的であった。そこで、調査参加者向けに調査への参加要件を示す際には、“性同一性障害（GID）当事者”と表記した。

—2014年9.24.受稿, 2014年12.5.受理—

Psychological growth in the gender transition experienced by people with gender dysphoria

Aki Nishino Mejiro University, Graduate School of Psychology
Tatsuo Sawazaki Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2014 vol.11

【Abstract】

Gender transition is a big turning point for people with gender dysphoria. It often involves medical treatment (e.g., cross-hormone therapy, sex re-assignment surgery). Treatments (male to female or female to male) bring about changes in one's physical appearance. This transition also involves re-construction of social adaptation, which is promoted by positive interactions with others and the social community they live in (i.e., coming-out).

We examined the factors that promoted well-being in the daily social life of individuals with gender dysphoria. A total of 326 Japanese people with gender dysphoria completed the Multidimensional Ego Identity Scale of Transgenders (MEIS-TG), the Gender Identity Scale (GIS), a measure of posttraumatic growth (PTG) through gender transition, a measure of the degree of physical appearance changes, and a measure of the degree of realizing daily social life with an alternative gender identity.

Results showed that (a) a firm gender identity as male or female negatively affects PTG, (b) a positive future perspective empowers individuals, and (c) both self-identity and interpersonal-identity positively influence PTG with regard to interpersonal relationships.

keywords : gender dysphoria, identity, psychological growth, gender dualism, empowerment

